

21世紀COEプログラム 平成16年度採択拠点事業結果報告書

1. 機関の代表者 (学長)	(大学名)	二松学舎大学	機関番号	32664
	(ふりがな<ローマ字>) (氏名)	WATANABE KAZUNORI 渡辺 和則		

2. 大学の将来構想

①大学全体の将来構想

本学は、明治初期の「欧化」「近代化」政策推進のなかで、我が国の伝統と東洋精神の衰退を憂えた三島中洲により、明治10年、伝統文化の継承と東洋精神の発揚をめざして創立された。以来ほぼ130年、昭和50年代初めの創立100周年を迎えたころには、文学部にあつては国文学科・中国文学科の2学科、大学院文学研究科では国文学専攻・中国学専攻の2専攻、および東洋学研究所・陽明学研究所の2付設研究所という、比較的小規模ながら国文学・中国学の専門性の高い研究教育体制ができあがった。

近年、平成3年には、国際政治経済学部、平成13年には国際政治経済学研究科を設立し、文学研究科・文学部とともに東アジア学術文化の総合的な研究教育をめざす体制を整えた。さらに、平成15年度には中国学専攻を3講座(中国学・日本漢学・総合文化学)制に改編、日本漢学を研究教育の柱の一つに位置づけ、同時に、東洋学研究所に国際漢字文献資料センターを設置して専任教員を配置し、漢字漢文文献の調査・整理を行う専門家養成に着手した。

平成16年度からは、文学部2学科のカリキュラム改訂を行い、中国文学科のなかに日本漢学のコースを設けた。また、付設の2研究所を改組して、東アジア学術総合研究所を立ち上げるなど、大学院・学部・研究所を一体化した、東アジア漢字文化圏の学術文化の研究教育に重点を置いている。

このような取り組みの背景には、近代以降、人々が軽視し切り捨ててきたアジアの伝統的な儒学文化やアジア的思考、そして、それらを支えてきた漢字文化そのものを再評価しようという、最近の世界的な動きがある。とりわけ、欧米の東洋学者等から、アジアの「近代化」先進国の日本における、かつての漢字文化のありようや漢文文献の調査研究(本プログラムのいう日本漢文学研究)の必要性・重要性が強く叫ばれているにもかかわらず、この分野の研究者層は国際的に希薄化が進み、研究が著しく停滞していると同時に、日本の国内国外で多くの文献資料が未整理のまま放置され、散逸の危機に瀕しているという、まことに憂慮す

べき状況がある。

以上の状況をふまえ、国際的要望に応えるために、早急に次の3項の具体策を実行に移さなければならないと考える。

- ア. 日本漢文学研究の世界的な研究ネットワークの構築
- イ. 日本漢文学研究の研究者の養成
- ウ. 日本漢文学研究の研究調査の実施

これらを実行しうるのは、本学こそ最もふさわしく、いわば本学の社会的責務であると自覚している。現在、本学は、法人全体の将来計画(グランド・デザイン)にもとづき、大学の管理運営体制・研究教育組織・施設等の見直しと改革を進めており、今回の拠点申請もその一環である。

②拠点形成の方針

本学がこれまで、我が国の国文学・中国学の専門家養成にはたしてきた伝統と実績を踏まえ、その特色をより明確にして国際的な研究拠点としての責任をはたすべく、漢字漢文文献研究、すなわち日本漢文学研究に関する次のような事業を行って、この分野の世界最高水準の大学づくりを目指す。

- ア. 日本漢文学研究の世界的な研究ネットワークの構築
 - 国際会議・シンポジウム・共同研究及び海外調査などを通じて、国内外に散在する研究者・研究団体・研究機関等と交流し、研究ネットワークを組織する。
 - (1) 上項の交流によって得られる研究情報(研究成果・文献資料等)のデータベース化を行い、そして情報をネットワークを通じて研究者・研究団体・研究機関等に発信・提供する。
 - (2) 学外研究者・専門家の招聘に当たっては、すでに策定した特別招聘教授規程等を運用し、任期制を導入する。
- イ. 日本漢文学研究の研究者の養成
 - (1) 大学院における研究教育体制の整備を行い、東アジア学術総合研究所にポスドクを対象とする研究員を採用する。

- (2) 定期的に講演会や講習会を開催して、学内外の研究者及び実際に文献資料の調査等に当たる実務者を養成する。
- (3) さらに、研究者養成の基礎である漢文（古典）教育の現状と課題を探るための国際シンポジウムを開催すると同時に、基礎的な漢文教科書の編纂を行う。

ウ. 日本漢文学研究の研究調査の実施

- (1) 本プロジェクトの研究組織のメンバーを中心に作業チームを作り、日本・中国・台湾・朝鮮における漢字漢文文献の交流と影響関係を、通史的あるいは分野別の研究調査を実施する。
- (2) 未整理の日本漢文学関係コレクションについて国内外で実地調査を行い、書誌学的データベースを作成する。
- (3) これらの実地調査を通じて、若手研究者・専門家の効果的な養成を行う。

③ マネジメント体制

学長直属のCOE委員会の立ち上げ（COEプログラム推進委員会＝学長議長 研究科長・学部長・研究所長・図書館長・学務局長・拠点リーダー、なお企画・予算等の審議は、担当者委員による実施委員会・研究担当者と協力者による担当者会議・推進委員会の議を経て発効）、COE事務局の設置と施設・スペースの確保（東アジア学術総合研究所内 研究員室も同）、特別事業予算の支出（年間2,000万円）、研究教育組織の改編と学外講師の獲得（東アジア学術総合研究所の設置と大学院・学部それぞれに日本漢文コース・講座開設）

3. 達成状況及び今後の展望

本プログラム採択の平成16年度初頭には、文学部のカリキュラムを改訂して中国文学科に日本漢文学のコースを設け、文学部と国際政治経済学部をつなぐ「東アジアの文化と社会」専攻を開設、また東洋学研究所・陽明学研究所を発展的に改組して、国際政治経済・韓国文化等6研究部門を包括する東アジア学術総合研究所を立ち上げて、東洋文化を中心とする教育・研究の全学的な体制を整えた。

採択後は、学内諸規定の整備と組織化をおこない、本プログラムにおける諸事業・諸計画のスムーズな推進を実現できるようにした。ちなみに本プログラムの活動計画は、担当者から選抜された実施委員による実

施委員会において策定され、研究担当者全員と協力者とを委員とする担当者会議の議を経て、学長を議長とするCOE推進委員会に上程、承認を得るシステムを形成した。

以上のような体制のもと、当初から活動内容を4本の柱を中心として、個々の活動をこれらに関連づけて推進した。4本の柱である

「ア. 文献データベースの構築と情報発信」は、文献データ約75,000点の入力と約18,000点のデータ公開、日本漢文関係論文等のデータ約12,000タイトルの公開、全文データ（含む儒蔵協力文献）約60点の入力があり、さらに江戸期日本漢文文献の蒐集約1,000点、和刻本漢籍経部・子部釈家類邦人序跋各120点強の入力を終了した。これらのデータに関連して、全国漢籍データベースや、国立情報学研究所へのリンクなども達成している。

「イ. 国内外の研究機関・組織との連携等」は、国際性と学際性を企図した国際シンポジウムの開催、機関紙『日本漢文学研究』の創刊、ニューズレターの和英併記、海外拠点リーダーの委嘱とリーダー会議の定期開催、海外における漢文読解講座の開講とワークショップの主催など、多様な実績をあげた。また国内機関・組織としては、国文学研究資料館・上野学園大学等との協力、訓点語学会・中世文学会等との研究会や講座の共同実施等の実績をあげている。

「ウ. 若手研究者および文献専門技能者の要請」は、COE研究員・研究助手の公募と彼らへの研究助成、2名の博士号取得の実現、各種公開講座・大学院講座・書誌技能講座などの開講などが実績としてある。

「エ. 漢文教育の研究と振興」は、本学独自の漢文教科書の編集と授業での実践、明治から昭和へかけての漢文教科書約400点の収集と公開などがある。

これらの活動は、中間評価の指摘をも勘案して、国際性・学際性、あるいは漢文訓読の広範な浸透をも見据え、今後のさらなる展開と継続を確実にするための基礎、あるいはその一端を十分確立したものと評価している。

本学は、今後も必要な予算措置を講じるとともに、さらに本プログラムが終了後の平成21年度からは、「日本漢文教育研究プログラム」を立ち上げ、これまでの成果を発展的に吸収し、教育・研究体制の維持継続のみならず、日本漢文の世界的な研究拠点としてさらなる教育・研究の向上と発展に努力し、大学全体の活性化と飛躍を実現したいと考えている。

21世紀COEプログラム 平成16年度採択拠点事業結果報告書

機 関 名	二松学舎大学	学長名	渡辺 和則	拠点番号	K25	
1. 申請分野	K〈革新的な学術分野〉					
2. 拠点のプログラム名称 (英訳名)	日本漢文学研究の世界的拠点の構築 Establishment of World Organization for Kanbun Studies					
研究分野(キーワード)	〈研究分野: 文 学 〉(比較文学)(国文学)(中国文学)(歴史学)(書誌学)					
3. 専攻等名	文学研究科中国学専攻・国文学専攻・東アジア学術総合研究所					
4. 事業推進担当者	計 24 名					
ふりがな(ローマ字) 氏 名	所属部局(専攻等)・職名	現在の専門 学 位	役割分担 (事業実施期間中の拠点形成計画における分担事項)			
(拠点リーダー) TAKAYAMA SETSUYA 高山 節也 (61)	東アジア学術総合研究所・教授	書誌学・文学修士	(総括)・書誌学・目録データ			
SHIRAFUJI NORIYUKI 白藤 禮幸 (70)	文学研究科国文学専攻・教授	国語史・文学修士	上古・中古日本漢文			
YAMAZAKI MASANOBU 山崎 正伸 (58)	文学研究科国文学専攻・教授	平安朝文学・文学修士	上古・中古日本漢文			
YOSHIMOTO HIROTO 吉原 浩人 (53)	文学研究科国文学専攻・非常勤講師	日本漢文学・文学修士	上古・中古日本漢文			
TANIMOTO SACHIHIRO 谷本 玲大 (37)	文学部国文学科・非常勤講師	和漢比較文学・文学修士	上古・中古日本漢文			
ISO MIZUE 磯 水絵 (58)	文学研究科国文学専攻・教授	日本音楽史学・博士(文学)	中世日本漢文			
TANAKA YUKIE 田中 幸江 (36)	文学部国文学科・非常勤講師	中世文学・博士(文学)	中世日本漢文			
MACHI SENJURO 町 泉寿郎 (40)	東アジア学術総合研究所・専任講師	日本漢学・博士(文学)	近世・近代日本漢文			
MORINO TAKAKI 森野 崇 (48)	文学部国文学科・教授	国語学・文学修士	近世・近代日本漢文 (平成18年4月1日交替)			
OSHIMA AKIRA 大島 晃 (62)	文学研究科中国学専攻・非常勤講師	日本漢学・文学修士	近世・近代日本漢文			
IBI TAKASHI 揖斐 高 (62)	文学研究科中国学専攻・非常勤講師	日本漢文学・博士(文学)	近世・近代日本漢文 (平成17年5月16日追加)			
YAMABE SUSUMU 山辺 進 (47)	文学部中国文学科・非常勤講師	中国思想史・文学修士	近世・近代日本漢文			
OGAWA HARUHISA 小川 晴久 (68)	文学研究科中国学専攻・教授	朝鮮儒学・文学修士	日韓文化交流			
SERIKAWA TETSUYO 芹川 哲世 (64)	文学部国文学科・教授	韓国文学・博士(文学)	日韓文化交流(平成18年4月1日交替)			
INOI MAKOTO 家井 眞 (62)	文学研究科中国学専攻・教授	中国古典文学・博士(文学)	漢文教育(平成17年12月22日追加)			
TANAKA MASAKI 田中 正樹 (47)	文学部中国文学科・教授	中国思想史・文学修士	漢文教育(平成19年4月1日交替)			
SATO SUSUMU 佐藤 進 (61)	文学研究科中国学専攻・教授	中国語学・文学修士	字書・訓詁・語法			
SATO KAZUKI 佐藤 一樹 (56)	国際政治経済学研究科国際政治経済学専攻・教授	日中比較文化史・文学修士	近世・近代日本漢文			
TAKESHITA ETSUKO 竹下 悦子 (50)	文学研究科中国学専攻・教授	中国中世文学・文学修士	近世・近代日本漢文			
O HOHEI 王 宝平 (52)	文学研究科中国学専攻・特任教授	中日比較文学・博士(文学)	日中文化交流 (平成17年3月31日辞退)			
AOKI GORO 青木 五郎 (71)	文学研究科中国学専攻・教授	漢文教育学・文学修士	漢文教育(平成17年10月25日辞退)			
WATANABE AKIYOSHI 渡辺 了好 (60)	文学研究科中国学専攻・教授	日韓比較文学・文学修士	日韓文化交流(平成18年4月1日交替)			
YOKOSUKA MORIHISA 横須賀 司久 (67)	文学部中国学科・教授	日本漢学・文学修士	近世・近代日本漢文 (平成18年4月1日交替)			
YOSHIZAKI KAZUE 吉崎 一衛 (65)	文学部中国学科・教授	日中比較文化学・文学修士	漢文教育(平成19年4月1日交替)			
5. 交付経費(単位:千円) 千円未満は切り捨てる () : 間接経費						
年 度(職)	16	17	18	19	20	合 計
交付金額(冊)	32,000	32,000	30,910	30,000 (3,000)	31,000 (3,100)	155,910 (6,100)

6. 拠点形成の目的

本プログラムが対象とする日本漢文学研究は、日本に伝えられてきた漢字漢文による文献資料の包括的総合的な研究を内容とするものであり、単に狭義の漢詩漢文など文学研究にのみ限定するものではない。歴史的にみれば、漢字漢文文献は日本の学術文化の根幹をなすところから、日本漢文学研究はすなわち日本学研究にほかならず、日本の学術文化研究の全領域をカバーすることになる。また、日本漢文学形成の過程からみて、その源泉たる中国の学術文化の諸領域、および朝鮮半島のそれらとの比較・交流研究は、この日本漢文学研究に欠くことのできないものであり、当然、中国学・朝鮮学の分野をもカバーするものである。

本プログラムにおける目的は、従来、日本文学の一部部門とのみ考えられてきた日本漢文学を、日本学研究そのものとして広く総合的な視野からとらえ直すこと、および中国学・朝鮮学との関連を重視して、東アジアの学術文化研究の一つとして位置づけることにある。これによって、学際的・国際的な新たな研究体制の組織が可能となり、これまでは個別的に散在し、比較的薄かった研究者層の統合・強化が期待できる学問分野を創出しうるものである。

そもそも日本漢文学の持つ問題点は、過去において、また現在においてそれが重視されたとは言い難い点であろう。その標記文字である漢字をも研究対象に取り込むことによって、漢字文化圏全体のなかで日本漢文学を再評価することが本プログラムの使命でもある。換言すれば、日本史レベルではなく世界史レベルでの日本漢文学を成立させることが重要で、そうした方法での当該研究は、かつて存在しなかったと言ってよい。このことは当然世界レベルでの漢字漢文文献の調査とデータベースの発信を目指すことになる。またそれと平行して、世界の所蔵機関や研究機関と連携して、それらの世界拠点となることを目指すことにもなる。同時に、現在漢字漢文文献に対する書誌学・図書館学的技能の保持者が激減している状況をふまえて、これらの諸機関と連携しつつ、世界レベルでの技能者の確保と養成を実現することも重要な任務である。

本プログラムが扱う分野に関連しては、日本語・日本文学関係組織として、国文学研究資料館・国際日本文化研究センターなど、中国学・東洋学関係組織として、京都大学人文科学研究所・東京大学東洋文化研究所などがあり、それぞれ重要な成果をあげつつあるが、日本漢文学それ自体は、中国の漢字漢文で表記されると同時に、日本人の著述という二面性を持つ資料であ

り、いずれの組織においても研究調査の対象になりにくいものであった。このことは現在各研究機関において進行中の漢籍データベースにおいても、基本的に和刻本漢籍や準漢籍、ひいては漢籍外の日本漢文関係図書を埒外に置く結果となっている。こうした文献をも網羅した詳細なデータベースを構築して、日本学系諸学問と中国学・東洋学系諸学問の両者を、本プログラムを仲介として連携させる効果をねらい、ひいては本プログラムを基幹とする、東洋学系ネットワークを構築することも目的の一つといえよう。

まとめて言えば、本プログラムは、これまで国文学と中国文学の両分野にまたがる複合領域に属するが故に、かえっておろそかにされる嫌いのあった分野に、多様な分野からの視点を導入して焦点をあてようとするものである。つまり我が国の文化・伝統の研究や発掘において、世界的規模での日本漢文学研究を確立して、中国や朝鮮の文化との関係のなかで我が国の文化・伝統の特異性や歴史的役割を解明するという意義を担うものである。

また、小規模な研究組織ではなしえなかった世界的レベルでの文献収集とそのデータベース化、そして広範に収集される情報の発信も、多様な分野において推進される関連研究への不断の情報提供という意味において、重要なものである。同時に、文献収集の基礎である漢籍書誌学の専門家の養成により、現在確実に払底している専門家を増加させ、将来においてさらに資料の発掘と情報の発信を充実かつ永続させうることも、本プログラムの重要性と発展性である。

こうした研究が生み出す成果は、日本漢文学の領域から日本学・中国学・朝鮮学、さらには欧米における人文系学問の諸分野に対してまでも、多くの建設的な影響を与えるものとなろう。

7. 研究実施計画

年度ごとに発展的・累積的に活動計画が策定されているが、本プログラム全体としては、後述の4本柱を基本とする活動を年度ごとに実施し、個々の研究班の活動もこれに関わりつつ専門的領域の深化拡充を計るもので、活動内容によっては班相互の研究協力も予定される。また組織としては、大学院文学研究科中国学専攻・同国文学専攻・および国際漢字文献資料センター（平成16年以降「東アジア学術総合研究所」に発展的に改組）を中心として、さらに国際政治経済学部・文学部のスタッフも加えて推進する。

四本柱とは、

- ア. データベースによる情報発信
- イ. 内外の研究機関等との連携
- ウ. 人材育成
- エ. 漢文教育

である。

これらに則る年度ごとの全体的活動としては、

- ア. データベースによる情報発信関係
漢字文献資料所在調査とデータベース構築・日本漢文関連文献の収集と整理等
- イ. 内外の研究機関等との連携
国際シンポジウムの開催・海外拠点リーダー会議の開催等
- ウ. 人材育成
公開講座や講演会・テーブルスピーチの開催・論文集・ニューズレターの発行等
- エ. 漢文教育
教科書編纂と教育実践等

が予定される。

個別活動としては、担当者個々の専門に基づき、

○上代・中古漢文班 ○中世漢文班 ○近世近代漢文班 ○朝鮮漢文班 ○漢文教育班 ○日本漢字音・字書・辞書班 ○日中文化交流班 ○書誌学目録データ班、以上8班に分かれて、それぞれの分野で個別研究を推進する。（なお中間評価以後、研究内容と進展の状況に鑑みて、一部編成替えを行った。）

【年度別実施計画】

○平成16年度

漢文教育および漢文教科書に関する国際シンポジウム、中国（海外）北海道（国内）における漢文文献調査とデータベース化、公開講座・講演会・テーブル

スピーチ等の開催、東アジア学術総合研究所における研究者養成システムの開始（COE研究員・研究助手の採用）、年次報告書の作成

○平成17年度

東アジア漢字文化圏における漢籍復刻に関する国際シンポジウム、ベトナム・韓国（海外）信越・北陸・東海（国内）における漢文文献調査とデータベース化、公開講座・講演会・テーブルスピーチ等の継続、東アジア学術総合研究所における研究者養成システムの継続、年次報告書の作成

○平成18年度

朝鮮儒学に関する国際シンポジウム、オランダ・フランス・イギリス（海外）近畿・中国・四国（国内）における漢文文献調査とデータベース化（実際はEAJRS等への参加による情報収集）、公開講座・講演会・テーブルスピーチ等の継続、東アジア学術総合研究所における研究者養成システムの継続、年次報告書の作成

○平成19年度

上代漢字文の成立に関する国際シンポジウム、アメリカ（海外）九州・沖縄（国内）における漢文文献調査とデータベース化、公開講座・講演会・テーブルスピーチ等の継続、東アジア学術総合研究所における研究者養成システムの継続、年次報告書の作成

○平成20年度

中国・朝鮮・日本の礼楽に関する国際シンポジウム、イタリア・ドイツ・台湾（海外）関東（国内）における漢文文献調査とデータベース化、公開講座・講演会・テーブルスピーチ等の開催、東アジア学術総合研究所における研究者養成システムの開始（COE研究員・研究助手の採用）、年次報告書の作成

以上の活動は当初の予定であって、活動の進展に対応して、海外講座の開始、機関紙『日本漢文学研究』の創刊、国際シンポジウムの海外開催、データベースの英文索引の付加、ニューズレターの発行、若手研究者による研究会の発足等、発展的に変更した部分がある。

8. 教育実施計画

1) 東アジア学術総合研究所における研究者養成プログラム

(目的)

学内外からCOE研究員として広く公募した学生・社会人に、選抜試験を課し、大学院とは別に高度な専門性に基づく研究および実務能力を持つ人材を育成する。

(方法)

- ・ 講習会・公開講座への優先的参加
- ・ 各地における調査への参加の義務
- ・ 目録の編纂とデータベース入力実務の修得
- ・ テーマ別の研究会の定期的開催
- ・ 研究員には給与と旅費などの必要経費を支給

2) 日本漢文学関係の公開講座・講習会の開催

平成15年度から、国際漢字文献資料センター業務として、前期・後期各9週間にわたる講座（漢籍書誌学概論・装丁史・仏教文献・江戸期出版文献・中国における日本文献 以上平成15年度）を開設した。

平成16年度以降は、書誌学関連講座のほかに、各分野専門の講座も並行して実施し、実務教育と並んで専門教育の充実も計る。なお、15年度の本講座・講習会には、国際漢字文献資料センター特別研究員の元本学教授戸川芳郎氏（平成16年度も東アジア学術総合研究所の特別研究員就任予定）、元本学陽明学研究所長松川健二氏、外国人特任教授王宝平氏が講師として参加していたが、平成16年度も参加の予定。

またシンポジウムの開催については、平成16年度8月に「漢文教育の現状と課題」のテーマで、日本・中国・台湾・韓国の研究者を招聘して開催する。17年度も「東アジア漢字文化圏における漢籍復刻」「朝鮮儒学」「中国・朝鮮・日本の礼楽」それぞれに関するシンポジウムの開催を計画している。

3) 大学院による研究者養成プログラム

平成15年度におけるカリキュラム改正の趣旨をさらに進展させるため、大学院レベルでの高度な漢文解読のための演習講座を充実する。

本プログラムにおける講習事業を、大学院日本漢学講座あるいは総合文化講座のなかに位置づけし、単位の取得も可能とした事業に拡大する。

4) 学部におけるカリキュラム

平成16年度から、日本漢文学関連の科目として、日本漢文学史・日本漢学概論・日本漢学講読・日本漢学演習が開講新設され、本学における学部・研究科一体の、日本漢文学研究および教育の充実が計られる。一方では、より一層の漢文訓読と読解の技能修得を目指す科目の新設が予定される。

これらの全てを通じて、学内はもとより広く学外の学生・社会人を含む研究教育を実施して、日本漢文学の研究者・教育者の養成に努める。

9. 研究教育拠点形成活動実績

①目的の達成状況

1) 世界最高水準の研究教育拠点形成計画全体の目的達成度

自己評価は「2 目的は概ね達成した」である。

本プログラムの活動方針は、当初から設定された4本の柱に沿って推進され、基本的にはその方針は5年間変動がなかった。

4本の柱とは、

- ア. 文献データベースの構築と情報発信
- イ. 国内外の研究機関・組織との連携等
- ウ. 若手研究者および文献専門技能者の要請
- エ. 漢文教育の研究と振興

である。

「ア. 文献データベースの構築と情報発信」は、日本漢文関連文献の所在情報のデータベース化と、日本漢文関連論文・著作等のデータベース化を継続して実施し、各種情報総計で85,964タイトルの入力を終えた。これらのデータベースについては、その趣旨や利用法等を英文化し、世界にデータを発信することによって、中間評価への対応を果たした。また、中国における「儒蔵」への資料提供として、40タイトルの日本漢文関係書籍を選択し、すべての文字入力を完了した。またこうしたデータ収集と関連して、本プログラムの一つの責務として、日本漢文関連古書の収集と保存が企画されたが、これについても総数約1,000点を上回る古文獻(江戸期から明治までの出版物中心)を収集し、現在目録作成中である。また明治から昭和に及ぶ漢文教科書約400点も収集した。これらの文献は、本プログラム・本学構成員、及び一般にも閲覧公開しつつ、研究教育の実践に活用されている。

「イ. 国内外の研究機関・組織との連携等」は、国内外の研究者との交流として、海外拠点リーダー会議・シンポジウム・ワークショップなどの開催と、中間評価に指摘された、海外の日本漢文研究者あるいは学生への日本漢文に対する認識の深化を実現させるための多様なアプローチを心がけた。国内においては、国文学研究資料館との研究交流をはじめ、訓点語学会・中世文学会などとの共催講座等を開催し、日本漢文学関連の専門研究者を協力者として多数糾合した。また海外における日本漢文学関連の研究者については、これを海外拠点リーダーとして招聘して、海外における当該研究の実情認識や、当方からの情報の紹介者として位置づけ、シンポジウムはもちろん、テーブルス

ピーチ・公開講座や集中講義の講師として招聘し、研究交流を実現した。特にシンポジウムにおいては、中間評価以後、中国杭州でのブックロードシンポジウム・本学での日本漢文の黎明シンポジウム・本学での漢字音と宗教音楽シンポジウムを開催し、着実に国際化と学際化の実を上げている。さらには日本漢文専門の機関誌『日本漢文学研究』を創刊して、国内外の多言語による論考を世界に発信するようにした。またニューズレター「雙松通訳」の記事はすべて英文併記として、海外における本プログラムへの理解を深めるようにした。これらは中間評価における、日本漢文に関する英文論考の用意、内外の人的コネクションの拡大などの指摘にも対応するものである。

また、同時に海外における漢文訓読の紹介と技術の向上、ひいては漢文という日本文化の一端への理解の深化を目指して、漢文訓読と漢文文化に関する海外講座を、イタリア・イギリス・タイ・ベトナム等の現地へ講師を派遣して実施し、また共同研究としてはアメリカでのワークショップの開催などがあげられよう。さらにはインターネットを通じての漢文訓読授業と読書会を実現し、現地における高い評価を得て現在も継続中である。

「ウ. 若手研究者および文献専門技能者の要請」は、若手研究者養成の一環として、COE研究員および研究助手を公募して、研究費・旅費等の支出も見込んで、COE活動関連の研究活動に従事させ、彼らの自主的な研究会や読書会をも開催して、多様な活動を保証するようにした。結果として2名の博士号取得者を得た。なお現在博士論文の提出が2名予定されている。

また、一般をも含めた書誌技能者養成のための公開講座も、特別講座・集中講座・大学院との共通講座・短期専門講座の形態で実施された。なお養成講座は書誌技能に関わるものを中心として、さらには広く日本漢文文献個々の特質や歴史についての各論も用意され、専門的内容であると同時に一般への啓蒙的方向付けも兼ねたものとなっている。なお、一般への啓蒙的方向としては、大学との共催ではあるが、論語シンポジウムが広く各界の人材を招聘して、その都度興味深いテーマで多くの聴衆を引きつけている。これらの活動は、中間評価における参考意見に掲げられた、漢文に対する一般大衆的な支持の確立をも意識した活動である。

「エ. 漢文教育の研究と振興」は、当初から本学独自の漢文教科書の編集を心がけ、6点のテキストと、1点の参考書を発行した。テキストについては本学

1・2年次生への授業で活用し、それぞれ成果を上げていると同時に、参考書も高い評価を得て再版を果たした。また、上記2で述べた海外講座・インターネット授業なども、漢文教育の世界的振興を促す作業として認識されるものである。

「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」というテーマに対し、日本漢文という現状では極めてマイナーともいえる、しかもその実極めて重要な日本文化の底辺についての、研究体制を国内外にわたって構築し、さらには海外における前代未聞の漢文教育体制をも確立し、個々の成果も含めて、小規模プログラムとしては予想外の成果を上げ得たものとする。したがって全体としての評価を「2 目的は概ね達成した」として過褒のそしりはないものと思われる。今後は、ポスト本プログラムの様々なあり方をも視野に入れつつ、これらの成果をより発展・充実させなければならない。

2) 人材育成面での成果と拠点形成への寄与

COE 研究員および研究助手を公募して、研究費・研究旅費等の支出も見込んで、プログラム活動を媒体とした研究活動に従事させ、彼らの自主的な研究会や読書会をも開催して、多様な活動を保証するようにした。その結果これまでに2名の博士号取得者を得、現在なお博士論文提出予定者2名がある。なおCOE 研究員・研究助手は本プログラムが主催する講演会・シンポジウムでの発表や企画、またCOE 出版物への寄稿や編集事業への参加、自主的研究会の計画と運営等、さらには博士号取得以後の、本プログラムにおけるデータベース構築への協力や海外での国際活動への援助・論文翻訳の援助等、自らの研鑽と同時に、過去未来を通じて拠点形成にも深くかかわっている。

また海外に人員派遣して日本漢文学講座を開講したことは、漢字文化圏以外のアジアや欧米における日本研究者に対する日本学基礎講座を保障するものであり、さらにはインターネット利用による講座・読書会も軌道にのせて、関係各国からの高い評価を得ている。

3) 研究活動面での新たな分野の創成や、学術的知見等

日本漢文学専門誌『日本漢文学研究』を発刊し、文学一分野に限らない広範な投稿を可能とした上で、さらに漢字文化圏以外の海外からの寄稿をも募ったこと、また国際シンポジウム・公開講演・テーブルスピーチ等を通じて、日本漢文学という分野に国際性と広範な対象を設定し、新たな性格を付与したことがあげられよう。

個別研究分野においては、中世における日本音楽と漢文資料の実態に迫る業績として、『藤原通憲資料集』『雅楽資料集』〈資料篇〉〈論考篇〉・『声明資料集』・『雅楽・声明資料集』第2輯・『雅楽資料集』第3輯・『声明資料集』第3輯・『雅楽資料集』第4輯を刊行したこと、日本漢文学史研究の基礎資料の発掘として『本邦における支那学の発達』や『支那学の発達』の整理刊行を実現したこと、漢文訓読における有力な参考書として『漢文文法と訓読処理』およびその改訂版の出版、E. Pulleyblank『古漢語語法概要』の翻訳出版なども、それぞれ新たな学術的知見としてよいと思われる。

4) 事業推進担当者相互の有機的連携

仏教音楽国際シンポジウムにおける、「上古・中古日本漢文班」、「中世日本漢文班」、「字書・訓詁・語法班」の協力による計画策定・人員交渉から開催までの活動において、学際的連携の手がかりを把握した。朝鮮の教科書収集や朝鮮における漢文資料中心のテキスト『朝鮮漢文』の編纂は、日韓文化交流班と漢文教育班の連携による成果である。また国文学・中国文学・中国哲学・国語学・中国語学・科学史等の専門家を集めて、漢文原点の解説をおこなう読書会、たとえば「桂庵和尚家法倭点研究会」「四書注釈書研究会」等を立ち上げ、各専門分野からの多様な意見・解釈を闘わせる場を構築した。いずれも今後そこから発生するであろう総合的学問の形態を確立する必要があるが、本プログラムにおいてもっとも困難な課題に対して、一つの方向性を示し得たことは大きな前進であると思われる。

5) 国際競争力ある大学づくりへの貢献度

海外拠点リーダー会議（10カ国）による世界的日本漢文学の視野の拡大と海外情報の受容から、実際に海外（5カ国）に人員派遣して日本漢文学講座を開講したこと、さらにはインターネット利用による講座・読書会（イタリア）・情報交換のシステム（ヨーロッパにおける図書館司書中心）を構築して、日本漢文学に対する海外における認識を新たにさせ、特定大学においては、単位認定講座の開設、あるいは定期的講座の継続希望の段階まで進展したこと、これらは本学独自の構想による展開であって、本学における国際競争力の端的な事例である。

6) 国内外に向けた情報発信

日本漢文関連文献の所在情報のデータ化と、日本漢文関連論文・著作等のデータ化ならびにデータ公開のためのシステムの構築と、全国漢籍データベースや情報学研究所等他の組織とのリンク関係を構築した。その後、所在情報では現状で入力総数74,485タイトル、うち所蔵機関を含む公開総数18,099タイトルを達成した。論文著作関係では、11,479タイトル（論文・一般和書・洋書）を公開した。これらのデータベースについては、その趣旨や利用法等を英文化し、世界にデータを発信することによって、中間評価への対応を果たした。また、中国における「儒蔵」編纂への資料提供として、40タイトルの日本漢文関係書籍を選択し、19・20両年度をかけて、すべての文字入力を完了し資料提供をすませた。また海外研究者からも要請のある和刻本漢籍邦人序跋231タイトルの収集を実現し、現在整理編集にかかっている。

7) 拠点形成費等補助金の使途について(拠点形成のため効果的に使用されたか)

特に重点的使途を箇条書きにすれば、

- データベースの構築と資料公開費用
- 国内国外におけるシンポジウムやリーダー会議・資料調査・国際会議への参加やワークショップの設定等費用
- ニューズレター・専門誌・資料集・専門文献・啓蒙図書・教科書の発行費用
- 日本漢文文献の現物収集と整理費用
- 人材教育のための研究員・研究助手の採用と各種講座・講演・講義の開設費用

がある。

本プログラムの最重点事項であり、補助金の使途として無駄のない効果的支出であったと考える。

②今後の展望

本プログラムでの成果を継承する活動として、「日本漢文教育研究プログラム」を立ち上げ、情報処理・文学芸術・歴史思想・書誌学・科学史・訓読研究の6分野に区分して、研究教育活動を展開する。さらに世界的規模で実績をあげつつある機関誌『日本漢文学研究』の継続編集と出版、ニューズレター「雙松通説」の継続、海外拠点コーディネーター会議の開催、対外講座の継続、収集資料の目録化と解題作成およびその公開、データ公開の継続、変体漢文研究会の立ち上げ等々を実施し、本学大学院の国文学専攻・中国学専攻・国際政治経済学専攻・学内研究所・文学部・国際政治

経済学部を広範に取り込んで、集約的な活動を展開する予定である。またこれまで人材教育の一環として採用した研究員および研究助手も新たに採用して、教育実績の向上を図ると同時に、一般向け啓蒙講座を今後は集中講座として引き続き開催する予定である。

大学としては、今後も必要な予算措置を講じるとともに、さらに本プログラムが終了後の平成21年度からは、「日本漢文教育研究プログラム」への支援として、これまでの成果を発展的に吸収し、教育・研究体制の維持継続のみならず、日本漢文の世界的な研究拠点としてさらなる教育・研究の向上と発展に努力し、大学全体の活性化と飛躍を実現したいと考えている。

③その他（世界的な研究教育拠点の形成が学内外に与えた影響度）

本プログラム独自の機関誌『日本漢文学研究』を創刊して、国内外の多言語による論考を世界の発信するようにした。日本漢文学専門誌は国外はもとより国内でも類書を見いだしにくい特異なもので、しかも外国語論考をも募集するものは皆無であろう。その反響は高く毎号300頁前後の論説を集めている。またニューズレター「雙松通説」の記事すべてに英文を併記し、海外における本プログラムへの理解を深めるようにした。

海外における漢文訓読の紹介と技術の向上、ひいては漢文という日本文化の一端への理解の深化を目指して、漢文訓読と漢文文化に関する海外講座を、当初はイタリア・タイの現地へ講師を派遣して実施した。さらにはインターネットを通じての漢文訓読授業と読書会を実現し、現地における高い評価を得て現在も継続中である。これらの講座を通して、現地においては漢文訓読に関する講座が実質的に機能しておらず、一方でこれらの活動への願望が高いことも認識され、他方ではイギリス・ドイツ・ベトナムからも講座開設、あるいは単位取得を可とする講座の開設まで要請されることとなった。日本文学を学ぶ上での必須事項である、漢文訓読への注目が高まったことを表す事象であろう。

21世紀COEプログラム 平成16年度採択拠点事業結果報告書

機 関 名	二松学舎大学	拠点番号	K25
拠点のプログラム名称	日本漢文学研究の世界的拠点の構築		
1. 研究活動実績			
①この拠点形成計画に関連した主な発表論文名・著書名【公表】			
<ul style="list-style-type: none"> ・事業推進担当者(拠点リーダーを含む)が事業実施期間中に既に発表したこの拠点形成計画に関連した主な論文等〔著書、公刊論文、学術雑誌、その他当該プログラムにおいて公刊したもの〕 ・本拠点形成計画の成果で、DP(ディスカッション・ペーパー)、Web等の形式で公開されているものなど速報性のあるもの ※著者名(全員)、論文名、著書名、学会誌名、巻(号)、最初と最後の頁、発表年(西暦)の順に記入 波下線() : 拠点からコピーが提出されている論文 下線() : 拠点を形成する専攻等に所属し、拠点の研究活動に参加している博士課程後期学生 			
○高山節也			
<ul style="list-style-type: none"> ・〔論文〕漢籍目録編纂における準漢籍の扱いについて(高橋智・高山節也・山本仁)、『汲古』46号、pp. 25-35、2004年 ・〔論文〕和刻漢籍龍頭本について—その特質と沿革—、『日本漢文学研究』第3号、pp. 143-175、2008年 ・〔著書〕『佐伯藩政資料漢籍目録』(共編) 佐伯市教育委員会 総p. 88、2004年 ・〔著書〕『松丸東魚蒐集印譜解題』、二玄社、総p. 537、2009年 			
○白藤禮幸			
<ul style="list-style-type: none"> ・〔論文〕安澄撰『中論疏記』中の内典系音義書について、二松学舎大学大学院紀要『二松』19、p. 213-230、2005年 ・〔著書〕文章と漢字、『朝倉漢字講座1 漢字と日本語』、朝倉書店、pp. 207-218、2005年 ・〔著書〕安澄撰『中論疏記』について、『築島裕博士傘寿記念国語学論集』 汲古書院、pp. 123-136、2005年 			
○吉原浩人			
<ul style="list-style-type: none"> ・〔論文〕藤原実兼の生涯と作品、『藤原通憲資料集』、二松学舎大学COEプログラム、pp. 6-13、2005年 ・〔論文〕『秋深夜漏蘭詩序』訳註、『東洋の思想と宗教』23、早稲田大学東洋哲学会、pp. 162-176、2006年 ・〔論文〕「古代文芸と唱導—大江匡衡秀句創作の背景と評価をめぐって」、『国文学 解釈と鑑賞』第72巻、第10号、pp. 124-132、2007年 ・〔論文〕「慶滋保胤勸学詩序考—白居易との関連を中心に—」、吉原浩人・王勇編『海を渡る天台文化』、勉誠出版、pp. 251-280、2008年 ・〔著書〕『古鈔本 江都督大納言願文集』、二松学舎大学COEプログラム、総p. 77、2009年 			
○谷本玲大			
<ul style="list-style-type: none"> ・〔論文〕『康熙字典』唐本・和刻本間に於ける巻序の差異について、日本語辞書研究第5輯、近思文庫、26頁、2007年 ・〔論文〕『康熙字典』唐本・和刻本間に於ける巻序の差異について、(近思文庫編)、『日本語辞書研究』第5輯、港の人、pp. 178-203、2007年 ・〔著書〕解説:『康熙字典DVD-ROM解説』、康熙字典DVD-ROM、紀伊国屋書店、総p. 102、2007年3月 ・〔著書〕図書:『康熙字典DVD-ROM』、文字鏡研究会監修、紀伊国屋書店、2007年3月 			
○磯水絵			
<ul style="list-style-type: none"> ・〔論文〕『山槐記』に見る音楽—『山槐記』音楽記事年表附簡易索引—、『雅楽資料集 論考篇』、pp. 23-122、2006年 ・〔論文〕大江匡房追跡、その恩顧の人々 付、大江匡房音楽関係史料、『雅楽・声明資料集』第二輯、pp. 96-124、2007年 ・〔論文〕大江匡房の音楽—楽書の江談より—、説話文学研究第43号、pp. 14-24、2008年 ・〔論文〕「大曲」考—『源氏物語』「若菜下」より—、源氏物語の展望第4輯、三弥井書店、pp. 163-198、2008年 ・〔著書〕『源氏物語』時代の音楽研究—中世の楽書から—、笠間書院、総p. 604、2008年 			
○田中幸江			
<ul style="list-style-type: none"> ・〔論文〕信西撰述『大悲山縁起』をめぐる諸問題、説話文学研究41、12頁、2006年 ・〔論文〕京都の北山—大悲山峰定寺をとりまく宗教世界—、『紀事』第32号 日本文学風土学会、pp. 1-13、2008年 ・〔論文〕上野学園大学日本音楽史研究所蔵『鎮守講式』の成立と神道伝授—近世根来寺と岩出惣社をめぐる—、『佛教文学』第32号、pp. 49-62、2008年 ・〔著書〕『藤原通憲資料集』二松学舎大学COEプログラム、共編(磯水絵・川野辺綾子・神田邦彦・櫻井利佳・ 			

高野慎太郎・田中伸作・廣瀬千晃)、総p. 248、2005年

- ・〔著書〕声明資料集第4輯、二松学舎大学COEプログラム、総p. 200、2009年

○町 泉寿郎

- ・〔論文〕関微草堂筆記を読んだ考証学者たち、『江戸文学』第38号、pp. 147-161、2008年
- ・〔論文〕日本に伝存した西魏写本『菩薩処胎經』をめぐる日中の人々、東アジア文化還流、pp. 1-22、2009年
- ・〔著書〕倉石武四郎講義『本邦における支那学の発達』(改訂・附索引)、(大島晃・河野貴美子・佐藤進・佐藤保・清水信子・戸川芳郎・長尾直茂・町泉寿郎)、汲古書院、総p. 161、2007年
- ・〔論文〕「新資料による前島密の漢字廃止論の再検討」『文学・語学』190、pp. 10-19、2008年
- ・〔著書〕『馬王堆出土文献注叢書 五十二病方』東方書店、pp. 1-221(共著)、2007年

○佐藤一樹

- ・〔著書〕『徐水生 近代日本の知識人と中国哲学—日本の近代化における中国哲学の影響』(共訳)東方書店、2008年

○竹下悦子

- ・〔論文〕聞一多の楚辞学—古代と近代の交錯する時—、『立命館文学』598号、pp. 349-358、2007年
- ・〔論文〕詩經の文学性—聞一多の古代学を中心に、渡邊義浩編『兩漢における詩と三伝』、pp. 245-278、2007年
- ・〔論文〕類書と詩—聞一多の初唐文学論(一)—、『日本聞一多学会報』第6号、pp. 95-119、2007年
- ・〔論文〕建安文学に見る詩の変容—文章不朽と詩の無名性—、狩野直禎先生傘寿記念『三国志論集』、pp. 183-206、2008年
- ・〔著書〕中国古代の祭祀と文学、創文社、総p. 231、2006年

○大島 晃

- ・〔論文〕朝鮮版晋州嘉靖刊本『北溪先生性理字義』五種対校略考、『漢文學 解釋與研究』8、pp. 1-47、2005年
- ・〔論文〕〈先学の風景—人と墓〉桂菴玄樹、『漢文學 解釋與研究』第10輯、pp. 179-197、2008年
- ・〔論文〕羅山隨筆抄訓釈稿(二)、『漢文學 解釋與研究』第10輯、pp. 85-162(共著)、2008年

○揖斐 高

- ・〔論文〕擬古論—徂徠・春台・南郭における摸擬と変化—、日本漢文学研究第4号、pp. 5-29、2009年

○山辺 進

- ・〔論文〕「随鷗吟社の設立に就いて—明治後期における漢詩結社の活動—」、『二松学舎大学東アジア学術総合研究所集刊』第36集、pp. 13-32、2006年
- ・〔論文〕「QUA TRÌNH TIẾP THU VÀ SỬ DỤNG CHỮ HÁN TẠI NHẬT BẢN」(「Some Words on the Process of Receiving and Using Chinese Character in Japan」)『TẠP CHÍ HÁN NÔM(漢喃雜誌)』、総第91期、pp. 41-53、2008年

○小川晴久

- ・〔著書〕『二松漢文』(思想篇)、二松学舎大学COEプログラム、総p. 75、2005年
- ・〔著書〕『二松漢文』(散文篇)、二松学舎大学COEプログラム、総p. 120、2007年
- ・〔著書〕『朝鮮(コリア)漢文』、二松学舎大学COEプログラム、総p. 102、2008年
- ・〔著書〕『二松漢文 中国漢文』(散文)、二松学舎大学COEプログラム、総p. 96、2009年

○芹川哲世

- ・〔論文〕新羅・渤海使臣と奈良・平安時代 文人貴族の漢詩交流 韓国語文学国際学術フォーラム Journal of Korean Culture, Vol. 11、図書出版 月印、pp. 139-166、2008年

○田中正樹

- ・〔論文〕明代に於ける出版と蘇軾像の形成、宋代士大夫の相互性と日常空間に関する思想文化的研究、『平成13～平成16年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書』、pp. 61-76、2005年
- ・〔論文〕秦觀思想所探、『中国の思想世界』、pp. 219-245、2006年
- ・〔論文〕王陽明の「物」の周辺—「物各付物」を中心に—、『陽明学』第20号、pp. 139-166、2008年

○佐藤 進

- ・〔論文〕藤原惺窩点本『詩經』における朱子叶音説とその所拠本、日本漢文学研究2号、pp. 31-57、2007年
- ・〔論文〕コロナブロードの開拓者 小林忠治郎— 羅振玉・董康・傅增湘らの協力者として、COEプログラム・国際シンポジウム論文集「ブロードと文化交流」、pp. 13-35、2006年
- ・〔論文〕『文選』の正文と注文における訓点の異同について—「西京賦」を例にして—、日本漢文学研究4号、pp. 47-74、2009年
- ・〔著書〕『全訳・漢辞海』第二版、三省堂、総p. 1729、2005年
- ・〔著書〕漢文文法と訓読処理—編訳『文言文法』—(佐藤進・小方伴子)、二松学舎大学COEプログラム、総p. 268、2006年

②国際会議等の開催状況【公表】

(事業実施期間中に開催した主な国際会議等の開催時期・場所、会議等の名称、参加人数(うち外国人参加者数)、主な招待講演者(3名程度))

○国際シンポジウム

・「東アジアにおける漢字文化活用の現状と将来」

—日本・中国・台湾・韓国の漢文教育と漢文教科書をめぐって— 平成16年8月28日～29日

於:二松学舎大学 参加人数:350名(海外13名)

招待者名:ドナルド キーン(コロンビア大学名誉教授)、顧 之川(中国教育部課程教材研究所)
林 熒澤(成均館大学)

・「世界における日本漢文学研究の現状と課題」平成17年9月3日～4日

於:二松学舎大学 参加人数:延 389名(海外25名)

招待者等:ウィレム ヤン ボート(オランダ・ライデン大学)、ロバート ボーゲン(アメリカ・カリフォルニア大学)、王 勇(中国・浙江工商大学)

・「ブックロードと文化交流—日本漢文学の源流—」平成18年9月16日～17日

於:浙江工商大学(中国・杭州市) 参加人数:延389名(海外25名)

・「実心実学思想と国民文化の形成」平成18年10月14日～15日

於:二松学舎大学 参加人数:169名(海外25名)

・「日本漢文の黎明と発展」平成19年9月8日～9日

於:二松学舎大学 参加人数:389名(海外20名)

・「文献学」平成19年9月8日～9日

於:二松学舎大学 共催等:淡工大学(台湾)、慶応義塾大学・早稲田大学、
参加人数:30名(海外5名)

・「東アジアにおける書院研究」平成20年1月26日

於:関西大学東京センター 共催等:関西大学グローバルCOE 参加人数:67名(海外10名)

・「第5回日本漢学国際学術研討会」平成20年3月28日～29日

於:台湾大学(台湾) 共催等:台湾大学 参加人数:延180名(海外150名)

・「仏教声楽に聴く漢字音—梵唄に古韻を探る—」平成20年10月18日～19日

於:二松学舎大学 参加人数:延 506名(海外30名)

招待者等:遠藤光暁(青山学院大学)、福島和夫(上野学園大学)、
スーブン・ネルソン(法政大学)、僧侶(中国・韓国・日本) 他

○ワークショップ

・「曲直瀬道三—古医書の漢文を読む—」平成20年9月25日～29日

於:オレゴン大学(アメリカ) 参加人数50名(外国人30名)

・「漢文教育 その歴史と今後の課題」平成21年2月27・28日

於:カ フォスカリ大学(イタリア・ベネツィア) 参加人数:30名(外国人20名)

○海外拠点リーダー会議

・第1回 平成17年9月5日 於:二松学舎大学 参加人数 23名(招聘外国人10名含む。)

招待者等:ウィリー ヴァンデワラ(ベルギー)、王 宝平(中国)、黄 俊傑(台湾)、

・第2回 平成18年9月17日 於:浙江工商大学(中国・杭州市)

参加人数:24名(招聘外国人8名含む。)

招待者等:ピーター コーニツキー(イギリス)、ウィリー ヴァンデワラ(ベルギー)、張 寶三(台湾)

・第3回 平成19年9月10日 於:二松学舎大学 参加人数:21名(招聘外国人7名含む。)

招待者等:ロバート ボーゲン(アメリカ)、徐 興慶(台湾)、グエン・ティ・オワイン(ベトナム)

・第4回 平成20年10月20日 於:二松学舎大学 参加人数:22名(招聘外国人8名含む。)

招待者等:アルド トリニー(イタリア)、沈 慶昊(韓国)、サオワラック スリヤウオンパイサーン(タイ)

2. 教育活動実績【公表】

博士課程等若手研究者の人材育成プログラムなど特色ある教育取組等についての、各取組の対象（選抜するものであればその方法を含む）、実施時期、具体的内容

○ COE研究員

〔採用条件等〕

- ・公募等：平成16年10月～、学内外からCOE研究員として学生・社会人を公募し、応募者の業績等書類選考および面接によって採用。
高度な専門性に基づく研究および実務能力に秀でた人材を育成することを目的とする。
- ・採用枠：各年度2名（最終年度は1名）
- ・任期：1年（1年につき更新可能）
- ・要望：日本漢文学関連の研究者で博士号取得を目指すこと。
各年度当初に研究計画書を提出、年度末に報告書を提出すること。
COE主催のシンポジウムのみならず、各種学会や海外のシンポジウム・ワークショップ等での研究報告や論文発表に優先的に支援すること。
研究および研究会・シンポジウム・読書会等の世話や企画、研究助手に対する指導や管理も担当する。
- ・給与：月額15万円（通勤手当は実費）
- ・勤務：初年度は、週3日出勤（次年度更新の場合は2日出勤）
- ・研究支援：年額15万円までの助成金を、申請によって審査のうえ実費支給

* 平成20年度中2名が博士学位取得した。

○ COE研究助手

〔採用条件等〕

- ・公募等：平成16年10月～、学内大学院後期学生からCOE研究員助手を公募
- ・選考：応募者から書類選考および面接によって採用
研究および実務能力に秀でた人材を育成することを目的とする。
- ・要望：COE関連のデータ入力や研究会・シンポジウム等の運営や文献の受け入れ業務等を担当。
同時に研究活動への支援によって、論文作成や口頭発表の機会を増やし、学問的レベルの向上を計る。
- ・採用枠：各年度5名程度とし、任期は1年、更新可能
- ・賃金：時間給（950円）
- ・勤務：週1～3日
- ・研究支援：年額10万円までの助成金を、申請によって審査のうえ実費支給

○ 書誌技能者養成講座

- ・目的等：日本漢文文献の散逸を防ぎ、日本漢文学の振興と学問的底辺の拡大を実現するための人材育成を目的とし、具体的には目録作成やデータの管理等の技能を習得させ、当該分野における一般教養を涵養することを目指す。
- ・方法：書誌学・文献学に関する各種講座・集中講義・講習会・国際シンポジウム等の開催と一般への公開。
- ・講座：各年度に特別講座2・集中講義2・講習会6
（大学院授業を本プログラム講座として一部一般開放）

○ 大学全体としての取り組み

- ・学部カリキュラムへの日本漢文学科目の新設
（日本漢文学史・日本漢学概論・日本漢学講読・日本漢学演習の新設）
- ・大学院講座の改編（中国学・日本漢学・総合文化学）

21世紀COEプログラム委員会における事後評価結果

(総括評価)

設定された目的は十分達成された

(コメント)

拠点形成計画全体については、本プログラムの成功のために、大学をあげて積極的支援を展開し、小規模であるが専門性に特化した大学の長所が十分に活かされていると評価できる。また、日本の漢文学が日本の文化形成にもたらした意味は極めて大きいにも関わらず、日本文学においても、日本学においても積極的な研究対象にならず、社会一般の関心の低さから、衰退の道をたどっていたが、大学の努力により、日本漢文学という新たな地平が切り開かれたことは高く評価できる。

人材育成面については、本プログラムが若手漢文学研究者の育成に持つ意味は極めて大きい。また、多くの若手研究者は極めて質が高く、日本漢文学の持つ意味を十二分に理解した論文業績を多数発表していることは、高く評価できる。

研究活動面については、日本漢文関連文献データベースの作成、機関誌「日本漢文学研究」の発刊は、今後本プログラムの継承発展のための確かな基礎になると思われ、その努力は評価できる。また、本プログラムを通じ、日本の漢文学者が今までなし得なかった、中国学とは異なる日本漢文学という新しいジャンルが、啓蒙活動や国際会議を通じて、国内外に広く知られ、韓国、ベトナムなど独自の漢文世界の研究者との交流の機会も、積極的に持たれたことは評価できる。しかしながら、個別の研究業績では、これまでの個人的、たこつば的な研究が大きく変わったようには見受けられず、今後の発展のため、ジャンルを越えた討論による、いわば「日本漢文学論」とでも言うべき理論的作業が期待され、単なる意見の交換ではない、実りある外国人研究者との共同研究の展開も期待される。

補助事業終了後の持続的展開については、大学は既に日本では漢学の拠点としての位置を有していたが、本プログラムにより、日本漢文学という領域での世界的拠点に成長したと評価できる。今後、本領域が本拠点によって、継承発展されることは、事業期間中の出版、国際会議活動の成果から、大いに期待される。